

強い矯正力や装置だけに頼る矯正から  
筋機能を生かした矯正治療へ!

# Muscle Wins!の 矯正歯科臨床

呼吸および舌・咀嚼筋の  
機能を生かした治療

近藤悦子／著

歯科矯正学の権威  
T.M.Grabber先生も絶賛!

●矯正治療による咬合の改善時、もっとも重要なことは——「舌と口腔周囲筋、そして咀嚼筋活動を整え、舌が自由に動くことのできる舌房の形成、気道の確保、鼻呼吸の確立である」「これらの機能は顎顔面骨格の成長発育に大きな影響を与え、顎発育の方向、歯の位置と方向、そして顎関節部の形成にも影響を与えるからである」(Dr. Grabber)。

●強い矯正力や装置のみに頼らないで、患者さんの機能を最大限に生かす治療に長年取り組んできた著者の臨床例は、Dr. Grabberの考えを証明した、まさに“Muscle Wins Method”。

●舌と口腔周囲筋、咀嚼筋の機能を治療に生かし、呼吸のしやすい咬合を再構築した多数の症例から33症例をピックアップし、その臨床コンセプトとテクニックをわかりやすく提示した画期的な一冊!

■A4判／296頁／オールカラー  
■定価21,000円（本体20,000円+税5%）  
ISBN4-263-44226-5

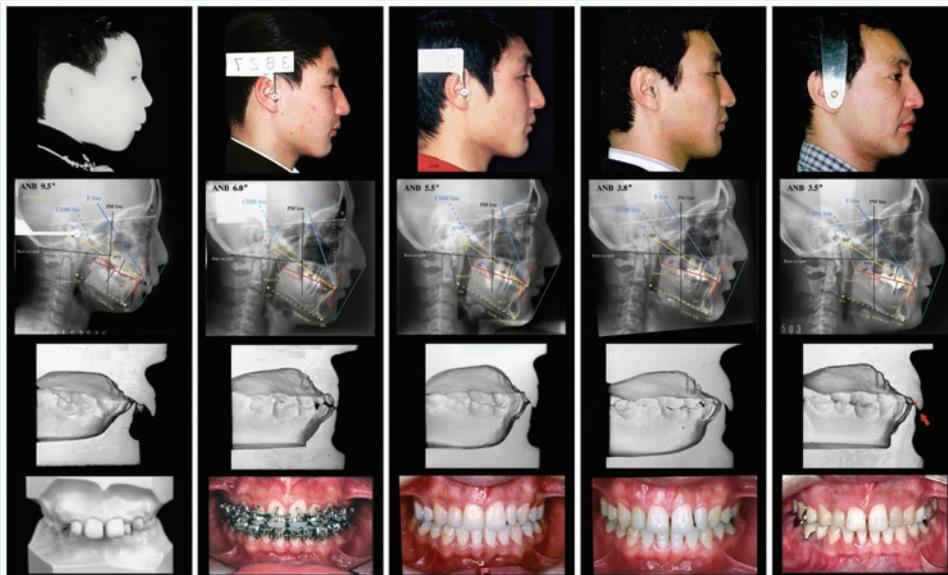
医歯薬出版株式会社

〒113-8612 東京都文京区本駒込1-7-10 TEL.03-5395-7630 FAX.03-5395-7633 <http://www.ishiyaku.co.jp/>

●Muscle Winsの 基本理念と そのポイント	I. なぜ筋機能を整え、鼻呼吸を確立することが重要なのか？ II. 筋機能の回復と矯正装置を組み合わせた治療の実際 診査のポイント/診断と治療のポイント/特徴的な治療/近隣矯正歯科のMFT/抜歯基準
●症例 AngleⅡ級症例 1類 過蓋咬合	Case 1 経過観察40年を通して学んだ咬合の長期安定の鍵—はじめてのⅡ級1類過蓋咬合症例 Case 2 切歯を圧下せず臼歯部咬合高径の増加により治療した過蓋咬合症例 Case 3 術後13年以上咬合が安定しているANB9.5°の症例 Case 4 ポジショナーを使用せず術後26年咬合が安定している症例
開 咬	Case 5 Ⅰの異所萌出を伴うANB8.0°の開咬症例 Case 6 舌の挙上訓練により術後の安定が得られている開咬症例
2類 過蓋咬合	Case 7 切歯軸の改善と咬合挙上により顎関節症状が消退した症例 Case 8 臼歯部咬合高径の増加により咬合が改善した症例
AngleⅢ級症例 過蓋咬合	Case 9 咀嚼筋活動が臼歯部咬合高径をコントロールすることを示唆された症例 Case 10 再植下顎4前歯を利用した非抜歯症例 Case 11 混合歯列前期の犬歯埋伏症例 Case 12 混合歯列前期に治療を開始したANB-6.0°の症例 Case 13 装置装着後3カ月で被蓋が改善されたANB-5.0°の症例 Case 14 術後22年以上咬合が安定しているANB-10.0°の症例 Case 15 Ⅰの逆性埋伏を伴うANB-10.0°の症例
開 咬	Case 16 ハビットブレイカーを利用した舌突出癖症例 Case 17 舌・口腔周囲筋・咀嚼筋・呼吸の機能回復が治療期間の短縮と術後の安定の鍵であることを示唆された症例 Case 18 歯槽突起には高い順応性があることを示唆された上顎叢生症例 Case 19 保定装置を使用せずに術後21年以上咬合の安定が得られているfull classⅢ症例 Case 20 Full classⅢが7カ月で改善された成人開咬症例—第1回WJO Board症例 Case 21 水平埋伏智歯を利用した成人症例
AngleⅠ級症例 過蓋咬合	Case 22 動的治療7カ月で術後20年以上咬合が安定している症例 Case 23 咬唇癖により下顎前歯に叢生が再発した症例
開 咬	Case 24 舌の挙上訓練により著しい治療効果と術後の安定が得られた症例 Case 25 早期の機能回復訓練により前歯部開咬を改善した症例 Case 26 歯列弓拡大により非抜歯で咬合の安定が得られた症例 Case 27 舌房の拡大による鼻呼吸の確立が治療効果を高めた症例
臼歯部咬合高径の左右差 開 咬	Case 28 頸部筋が下顎枝、下顎頭の形態形成に関連していることを示唆された症例 Case 29 胸鎖乳突筋の形成術により顎関節の健全な発育が得られた症例
過蓋咬合	Case 30 ANB-8°のⅢ級側方偏位の過蓋咬合症例 Case 31 頸部筋の左右差を完治させえなかった顎関節の形態異常を有するⅢ級症例 Case 32 片咀嚼により咬合高径の左右差が増悪されたⅢ級側方偏位症例 Case 33 上下顎歯槽骨が順応して非抜歯で治療できた成人の過蓋咬合症例

### AngleⅡ級症例 1類・過蓋咬合

Case 1 経過観察40年を通して学んだ咬合の長期安定の鍵—はじめてのⅡ級1類過蓋咬合症例



初診時  
(9歳9カ月)

動的治療終了時  
(12歳4カ月)

術後2年  
(14歳4カ月)

術後10年  
(22歳4カ月)

術後38年  
(50歳4カ月)